DOLL

如月小春

登場人物

恵子

麻里

京子

みどり

いづみ

右眼

右耳

左眼

左耳

麻里の兄

上村孝行

第一章　春

待ちに待った新学期、今日から高校生になる恵子が、鏡の前で制服姿の自分に見とれている。

母の声――恵子、何やってるの？　早くしないと遅れますよ。荷物はちゃんと確かめた？　忘れ物はなーい？　ほら、そこぼしてる。早く食べなさい。もういいから。夜更ししてるからよ。だめですよ。むこうに行ったら何でも自分でしなくちゃいけないんだから。大丈夫かしら、この娘は……

恵子――大丈夫よ、おかーさん、心配しないで。私ちゃんとやるから。ねぇ見て見て、おとーさん、ネクタイ曲がってない？

父の声――かわいいよ。高校生らしいよ。

恵子――ほんと？　うふ♥　きや♥

母の声――気をつけてね。ついたら電話するのよ。ハンカチ持った⁉　切符は⁉　先生の言うこと聞いて、しっかり勉強するのよ。好き嫌いしないで何でも食べなさい。手紙書いてちょうだいね。休みには必ずかえってくるんですよ。

恵子――わかってるって、まかしといて!!　おとーさん、身体(からだ)に気をつけてね。無理しちゃだめよ！

父の声――しっかりやれよ！

恵子――はーい！　おとーさん、おかーさん、行ってきまぁーす。

恵子――四月八日、晴れ。今日から私、高校生、うわ――ぁい。一人で寄宿舎なんてはいっちゃうんだ。うふ♥　おとーさんもいない、おかーさんもいない。大きなかばん持ってると、家出人みたいにみえるかも。ちょっぴし心配。キャイン!!　だけどすっごくうれしいんだ、ほんとはさ。がんばるぞ、いっぱいあそぶぞ！　大丈夫、勉強だってちゃんとやるもん。友達だっていっぱいつくるんだ。新しい制服、ちょっと大きめ、ちょっぴし背がたんない、ちょっぴしだけどさ。気分は晴れ、大大の大快晴、文句なし。いってきまぁ――す。

歩き出す。すると向こうからもう一人、同じ制服を着た女の子が、

麻里――星野さん！

恵子――あれー、岡本さんじゃない？

麻里――星野さんもセントマリア？　知らなかったぁ。
恵子――私も！　わあ、うれしい。よかったぁ。一中から来たのって私だけかと思ってたぁ。一緒にいこう！
麻里――ええ。――ねえ、星野さんって……セントマリア……第一志望？
恵子――私、ここしか受けなかったの。
麻里――あ、そうなの、自信あったのね。私ね、ここ第三志望。東洋英和も女子学院もだめだったの。
恵子――ほーんとお。
麻里――ぜったい自信あったのにぃ。だってここ合格率あんまし高くないでしょ？　心配だわ。
恵子――大丈夫よ。岡本さん成績いいもん。
麻里――一学期が勝負なのよ。先生の見方が決まるってやっぱり第一印象でしょ。あたしどうしよう。ねえどうしよう。それに寄宿舎、一人部屋じゃないんでしょう。一緒の人にうるさい人がいたら困るな。
恵子――ええ？　楽しいじゃない、知らない人と一緒って。私、絶対仲良くしちゃう。

麻里――いいわねえ、星野さん神経が太くって。私だめなのよ。そばでちょっとでも音がすると、勉強できなくなっちゃうの。不安だなあ。それに、ねえねえ見てえ（と、かばんを開くと本!!）私たくさん本持ってきたの。毎晩一冊ずつ読もうと思って。最近の現国の傾向は長文の読解力なのよね。

恵子――すっごーい！

麻里――星野さんは本を読まないの？

恵子――うんとね――

そしてもう一人、ちょっと不良っぽい感じの女の子が、ビッグコミックを手に持って、

京子――オレ、ビッグコミック――読む？

麻里――い、いいです。

恵子――セントマリアの方ですか？

京子――そうだよ。

恵子――一緒にいきませんか？

京子――お、先行っていいよ。

恵子――でも急がないと入学式おくれますよ。

京子――いいよ、オレ入学式でないから。
恵子――え、でもお……
京子――入学式から学校なんか行ってられるかよ。
恵子――そんなあ。
麻里――（顔をしかめながら）ねえ、早く行きましょうよ。
恵子――でもお……
京子――行け行け、早く行け。
麻里――こんなのにかかわってると遅刻するよ。
京子――そうだよー。それとも一緒にさぼる？　あっそうだ。海行こうか！
麻里――だめです、そんなの。
京子――いいよいいよ。行こう行こう！
麻里――もういいっ！　あたし一人で先行くから。
京子――へえーっ、あんた学校そんなに好きなの。
麻里――入学式に出ないと先生に叱られるでしょう。
京子――ははーん。先生がこわいんだ。

麻里――そうじゃないけど。決められたことはきちんと守らなくちゃ。だって高校生なんだもの。

京子――あーんな長ったらしいお説教なんかきいてどこが面白いんだろうねえ。海行った方がよっぽど楽しいと思うけどねえ。やだねえ、いい子ちゃんは。

麻里――何よ、その言い方。ねえ、どういうこと？

恵子――岡本さん！　いいからもう行こ。

京子――ああ、行け、行け！

麻里――いやあねえ。ああいう人がいるからいやなのよ。ああいう人とだけは一緒の部屋になりたくないわね。

今度は電話ボックスのところで半ベソをかいた女の子。

みどり――うん。……うん……そう。信号のとこ……迷っちゃったんだ……どうしよう……どっちいけばいいの……ええ――？？　わかんないよお……やだあ……ママあ……むかえにきてえ……一人じゃいけないよお……いきたくないよお……やだよお。

恵子――あの……

みどり――はい。

恵子――どうかしたんですか。
みどり――迷っちゃったんです。
恵子――セントマリア、の方ですよね。
みどり――はい。
麻里――一年生？
みどり――はい。
麻里――私たちもなの。
恵子――入学式でしょ、一緒に行きましょうよ。
みどり――ええ……でも……
麻里――どうかしたの？
みどり――ママがむかえに来てくれるから……
三人――ママあ？
みどり――だって、私、一人で電車に乗ったことってないから。
麻里――学校行く時も？
恵子――買物とかも？

京子――遊びに行くのも？
みどり――いっつもママが一緒に来てくれた。
京子――ほーんとかよ。よくそれで今まで生きてこれたもんだな。珍しいタイプだね、あんた。
みどり――そんなことないと思うけど。みんな一人で来たの？
三人――そうよ。
みどり――わあ――すごいんだあ。こわくない？
京子――そんなのこわがってたら寄宿舎なんかはいれないよ、山ン中なんだぜ。夜になると廊下なんかまーっくらで、おばけが出るんだぜ。知ってる？　あそこの寮、おととし首つったやつがいてさあ、毎晩十二時すぎると泣き声が……ヒェ――！
みどり――わあー!!　やだあ、みどりかえるう！
恵子――ほんとですか、今の話。
京子――じょーだんよ、じょーだん。ああ、おもしれえ！
　と、シャキシャキ少女が急ぎ足で通りかかる。
いづみ――あの、すいません。セントマリア行くのこっちの道でいいんですか。

恵子――ええ、だと思いますけど。
いづみ――あれぇ、あなたたち一年生？
麻里――そうですけど、あなたも？
いづみ――そうですけど、じゃないよ。こんなとこで何やってるのよ、今何時だと思ってるの？
恵子――八時二十八分……
三人――ええーっっっ!!
麻里――ちょっと大変、おくれちゃう。
いづみ――ほら、早く荷物持って！
京子――お前、何だよこの大きなかたまり。
みどり――まくら。ママがつくってくれたの。
京子――またママかよ。
いづみ――どっちいくの、どっち？
恵子――右、右！
いづみ――あーあ、初日からマラソンなんて。やっぱりご飯一杯にしとけばよかった。

麻里――ちょっと、何よ、この坂！　のぼるの、ここ!!
恵子――そうそう。さあ、がんばって！
京子――じょうだんじゃないよ、オレ、かえる。
恵子――何言ってるのよ、ここまで来て！
みどり――ママは、ママ!!
いづみ――ほら、あと一分。ダッシュ！　ダッシュ！　あそこの時計台まで！
恵子――ファイト！　ファイト！

あわてて坂を駆けあがる五人。すると目の前に白い校舎が見えてきた。

五人――ここだあ！

麻里――四月八日、晴れ。今日から私、高校生。寄宿舎にはいるなんて困ったなあ。おとーさんもいないし、おかーさんもいない。この孤独感、まるで受験生みたいだわ。あーあ、どうしよう。うれしくないわけじゃないけれど、でもちょっぴり不安。数学はいよいよ難しくなるし、一番とれるかなあ。よーし、いっぱい勉強するぞお。ま、時々気晴らしに遊びも入れてと。友達ともま、適当につきあって。新しい制服、ちょっぴり胸がたん

ない。でもそのうちきっと大きくなるだろ。気分は……晴れ時々曇りぐらいかな。風も少しある感じ。文句は別にないけれど。じゃ、いってきまぁす。

京子――――四月八日、晴れ。今日から私いちおう高校生。寄宿舎にはいる。うるさいのがいなくなってせいせいする。好きなだけ遊んでやるんだ。何言われたって気にするもんか。煙草も吸うぞ。酒も飲むぞ。大丈夫。勉強だけは絶対にやらない。ダチはほっときゃそのうちできるだろう。新しい制服、だいぶ長め。すごく歩きにくいけど、それがまたいかしてる。気分は晴れ、というほどのこともないけど、勝手にしやがれ。文句もない。いってきまーす。

みどり――――四月八日、晴れ。今日から私、高校生なの。どうしよう。一人で寄宿舎なんかいけないよう。こわい先生がいたらどうしよう。いじわるな子がいたらどうしよう。あーん、いきたくないよう。おかーさん、おとーさん、あたしもうかえる。みーんな知らない人ばっかりだし、朝は七時に起きなくちゃいけないし。教科書なんてむずかしくて読めないし、いやだよお。心配だよお。新しい制服は、ちょうどぴったりだけれど、気分は雨、大大の大雨、文句あり。いってきまーす。

いづみ――――四月八日、晴れ。今日から私、高校生、なーんちゃったりして、寄宿舎には

いります。荷物は着替えと筆記用具、ま、こんなもんでしょ。遊ぶ！　勉強もまあ少々。でもそれより何より、いろんな新しい活動に首つっこんで、とにかく有意義な三年間にしたいと思ってます。友達、いいやついるといいけどな。新しい制服、ちょっと照れてみたりなんかして、似合ってる？　気分はまあまあのお日和ってとこ。雲も適当に出てるし、これが普通なんじゃないかな。文句は言ってもしょうがない。いってきまーす。

五人、寄宿舎のそれぞれの部屋に荷物をおく。

いづみ――ねえねえ、あんたどっから来たの？

恵子――私、東京。荻窪って知ってる？

いづみ――知ってる！　知ってる！　吉祥寺の近くでしょ。わあー、都会っ子なんだ。

恵子――星野恵子っていいます。よろしく。

いづみ――私、佐藤いづみ。茅ヶ崎出身。

恵子――湘南ガールね。

いづみ――まあね。そっちの彼女は？

麻里――岡本麻里です。よろしく。

恵子――麻里ちゃんと私はね、同じ中学だったの。
いづみ――前っからの知り合いなんだ。
恵子――そう。ね、麻里ちゃん。
麻里――ええ……
いづみ――わあー、すっごい参考書。あれ、三年生のなんかまであるじゃない。
恵子――麻里ちゃんはね、すごくできるのよ。ずうっと一番だったの。
いづみ――頭いいんだぁ。よかったぁ。テストの時、頼っちゃお。教えてね。いろいろとよろしく。
麻里――ええ……
恵子――どうしたの？
麻里――あの人……どうしよう。一緒の部屋だなんて。私、勉強できないわ。
恵子――ああ、あの人ね。
京子――（指に煙草を持って）ねえ、誰か、灰皿持ってない？
三人――灰皿？
京子――そう。

いづみ――そんなもの持ってるはずないでしょ。
京子――あれ、あんたたち、煙草吸わないの。
恵子――煙草なんか吸うの。あなた……えーと……
京子――吉川京子。地元の子。よろしくね。吸わないのか、そうか。仕方ねーな。
麻里――ちょっと、やめなさいよ。（煙草をとる）
京子――何すんだよ。
麻里――高校生が煙草なんか吸っていいと思ってるの？
京子――吸わないあんたたちの方がよっぽどおくれているんじゃないの。
麻里――冗談じゃないわ。法律で禁止されてんのよ。
京子――えらそうなこというんじゃないよ。法律なんてのはね、破るためにあるんだよ。いい子ちゃん。
麻里――何よ、あなたみたいな人がいるからこの学校の程度が下がるのよ。
恵子――やめなさいよ!!　麻里！
麻里――どうしても吸いたいんだったら外で吸って！
京子――何でオレが出るんだよ、あんたが出ればいいだろ。

麻里――どうして私が外に出なくちゃいけないのよ。
京子――うっとうしいからだよ！　参考書なんかチラチラさせて、あ～臭い！
いづみ――吉川さんもやめなよ。
京子――こいつが言いだしたんだぜ。
麻里――ああうるさい！　これじゃ勉強なんてできやしない。先生に言って部屋かえてもらうわ！
京子――ああ、出てけ！　出てけ！　勝手に出てけ！
恵子――そんなこといわないで。せっかく一緒の部屋になったんじゃない。ねえ、麻里も落ち着いて。
麻里――恵子もこの人の肩をもつの？　煙草よ、煙草、フケツよ。
京子――何だって、もう一ぺん言ってみな。
麻里――フケツよ！
いづみ――やめなよ、二人とも!!

授業を知らせるチャイム。一時間めの授業が始まる。席に着く五人。

声――ごきげんよう。

一同――ごきげんよう

声――まあ、お元気のよいこと。それでは今日は教科書十三ページ、農耕民族についてからですね。

一同――はーい！

声――宿題はやってきました――よね。問一から問五まで、それでは黒板に出てやってもらいましょう。問一の因数分解を、えーと、星野さん。

恵子――は〜い。　X=3Y+2 です。

声――問二の英文和訳を、では、吉川さん。

京子――おい、ノート見せろ。

麻里――やーよ、やってこないのがわるいのよ。

京子――いいじゃんかよ、見せたって減るもんじゃないんだから。

麻里――べーだ、誰が見せるもんですか。

声――吉川さん、吉川さーん、お休みですか。

京子――あ、はい。

声――いそいでちょうだいね。

京子――じゃピップ（皆の世話をやく面倒見のよさから、いづみには会長というあだ名がついた。会長→ピップ・エレキバンの会長→ピップ）、お前、見せろ、やってあんだろ。

いづみ――今度だけよ。

京子――サンキュ、助かる。あとでおごってやっからよ。ぶい、あい、しい、てい、おー、あーる、わい（Vサイン）。

声――はーい。では、問三の化学式を、これはちょっとむずかしいわね。誰かできる人。

麻里――はい。

声――岡本さん、あなた、入学試験トップだったわよ。

一同――さーすがあ。

声――そして問四の書き下し文を、佐藤さん。

いづみ――はい。

声――はい、皆さん、大変よくできましたね。このクラスは優秀ねえ、先生うれしいわあ。では、最後の問五、食用ガエルの解剖を――えーと、高田さん。

京子――おい、泣き虫！　まくら！　あたってるぞ！

恵子――みどりちゃん！
声――高田さーん？　いませんか？
みどり――はい……
声――あ、いるのね。じゃ、やってください。
みどり――あの……あたし……できませんでした。
声――何ですって？
みどり――やってきませんでした。
声――まあ、何ということ！　何でやってこなかったの？
京子――馬鹿、何で正直に言うんだよ！
麻里――あたしの見せてあげるから、やってらっしゃいよ。
みどり――だって、だって、カエルがこっち見てるから、――えーと、痛いから、死んじゃうから。
声――解剖すれば死ぬに決まっています。みんなやってきたんですよ。何でサボッたんです。言ってごらんなさい。
みどり――カエルが動いたから、ぬるっとしてて、それで、あたし、かわいそうで、気

持悪くって。

声――――ノート見せてごらんなさい。あらまあ、問一も問二も、まあ、全部やってないじゃないの。

みどり――――むずかしくって、私、どうやったらいいのかわからなくって。

声――――授業きいていればできるはずです。

みどり――――わからないんです。私、全然わからないんです。あたし、あたし……

声――――前に出て立ってなさい！　ちゃんと解剖するまでゆるしませんよ。

みどり、カエルを前に立たされる。そして日が暮れた。

みどり――――どうしよう、いやだよう、こわいよう、もうこんなところにいたくないよう。ぐしっ。ママ、むずかしいんだ、とっても。頭の中がぐるぐるする。先生にあてられると胸がくるしくって、死にそうなんだ。ママ、あたしやめて帰りたい。帰っちゃ駄目？　どうしても駄目？　友だちもみんなこわいんだよ。いじわるで、いじめたりするんだ。ママはきっと仲良くなれるっていったけど、無理だ、絶対に無理だ。あたしもう高校なんていきたくない。

あ、カエルがまた、こっちみてる。痛いもん、絶対痛いもん。どうしてみんなできるんだ

ろう、こんなこと。
そうだ、はなしてあげよう――ね、カエルさん♥　一緒にかえろう。いやだよね、こんなお皿の上にいるのいやだよね。あたし、荷物とってくるよ。そしたら一緒に外に出よう。もう少し暗くなったらきっと誰にもみつからないよ。
さよなら、いじわるなみんな、みんなきらいだ。
いづみ――あれ、みどりは？
恵子――まだ立たされてるんじゃないの。
麻里――行ってみようか。
京子――ほっとけ、ほっとけ。

みどり、学校の外へ出る。夜の道。部屋では他の四人が心配している。

みどり――暗い、何て暗いんだ。全然見えない。どっちいけばいいんだ。右？　右かな。あれ、行きどまりだ。左へ行ってみよう。ちがう。おかしいな。わかんなくなっちゃった。確か、こっちが駅。ううん、ここじゃない。どうしよう、わかんない。わかんない！　わかんない!!
京子――だいたいあいつちょっと甘えてんだよ。

みどり――あなたたちに私の気持なんてわかるもんか。
いづみ――みんな心配してんだよ。
みどり――嘘。自分たちばっかり仲良くして。
麻里――ね、勉強教えてあげる。
みどり――いいもん。どうせ私、何にもできない
恵子――やればできる。
みどり――できない！
京子――だったらさっさと帰れよ！
みどり――だから帰るって言ってるじゃない。
いづみ――帰るってどこへ？
みどり――ママのいるとこ。
麻里――ママがみどりをここに入れたんじゃないの？
みどり――いつでも帰ってらっしゃいって言ったもん。
京子――甘ったれんじゃないよ。
恵子――がんばらなくっちゃ。私だってこわいとか思うけど、だんだん大人になって

一人でやらなくちゃいけなくなるし、とか思うと。

みどり――大人になんかならない。私、ずっとママのそばにいる。

京子――そんなら帰れ。

みどり――ママ、ママ、むかえに来て！　ママ、暗い。みどり、わかんない！　こわい！　いやだ！　帰る！　もういやだ！　ママ！　ママ！　ママ！

何度も呼ぶ。が応えはない。

どうして来てくれないの！　ここよ、ここ！　重いの、お皿がつめたいの。薬はいやなにおいがする。ピンが、ピンがはずれない。光ってる。メスが来る。助けて！　痛い！　その手、どけて！　おねがい！　助けて、助けて！　どうしてそんなことするの！　痛いよ！　痛いよ！　痛いよ！

波の音。海辺に来ている。

恵子――みどり――！　みどり――！

麻里――あっ、あそこ！

いづみ――みどり、おい、どうした。

恵子――風邪ひくよ、こんなとこいると。

みどり――ママ、来ない。
京子――来るはずないだろ。かえろうぜ。陽が昇っちゃうぜ。
みどり――ママ、来てくれない。
麻里――ああ、寒い。
いづみ――ほら、荷物持ってやるから。
恵子――ね、行こう。
みどり――もうどこにも行きたくない。
京子――じゃ、いろ。めんどいやつだな。
麻里――そんな言い方ってあんまりよ。
京子――いたいって言うんだからしかたないだろ。
麻里――京子って冷たいのね。
京子――優しくよしよしってやればそれですむのかよ。そっちの方がよっぽど冷たいんじゃないの。こいつみたいのは、突きはなした方がいいんだよ。
麻里――それにしたって言い方ってもんがあるでしょ。
いづみ――まあ、二人とも。

恵子――あ、海が白くなってきた。
いづみ――ほんとだ。
恵子――海って、広いんだなあ。
麻里――うん。
京子――すごいや。

四人、海を見つめている。間。

みどり――……あたし、かえる。
恵子――かえるってうちへ？
みどり――……みんなと一緒に行く。

刑事たちが寄宿舎の階段を上ってくる。

一同――一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、
右眼――ここだ。

扉をあけようとするが、あかない。

右耳――あかない。

体当たりであけてしまう。少女の部屋が広がっている。

一同――机、椅子、本棚、窓ガラス、ベッド、蛍光灯、鏡、電気スタンド、コーヒー・カップ、ドライヤー、ぬいぐるみ、ブラウス、目覚まし時計、じょうさし、絵葉書、カーテン、じゅうたん、壁、壁、壁。

右眼――高田みどり、十六歳、一九六六年六月五日生まれ。

右耳――本籍、東京都品川区北品川十六の四の一。

左眼――高田孝二、純子の一人娘。

右眼――海岸には、アルバムが残されていた。

右耳――そして、――

右眼――佐藤いづみ、十六歳、一九六六年十一月三日生まれ。

右耳――佐藤学、栄子の長女。弟みつる十一歳。

左眼――本籍、神奈川県茅ヶ崎市白浜四の一二〇。

右眼――一九七三年四月茅ヶ崎第二小学校入学。友達のめんどうをよく見て進んで仕事をする子だった。

右耳――一九七九年三月、卒業。

左眼――同四月、藤沢中学入学。一年、二年とクラス委員をつとめ、秋の選挙で生徒会長に選出される。

右眼――一九八二年三月、藤沢中学卒業。

右耳――同四月、セントマリアンヌ女子学院に入学する。

左眼――明るい人柄に友人多く、皆の相談相手になっていた。たのきんトリオのヨッチャンが好き。プロマイド二十五枚。

右眼――動物が好き。自宅では犬を飼う。もらわれてきたヨークシャテリアの雑種、名前はロン。弟と交替で、毎朝、散歩。

右耳――手のかからない子でした。小さいころから家にいることはほとんどなく、外で友達と遊んでいました。

左眼――親に何でもよく話す子でした。あの子がいると夕食の時に、その日の出来事をいろいろ話すので、楽しい思いをしました。

右眼――寄宿舎にはいってからも、週に一度は、必ず電話を入れていました。あの前の晩にも、明日は授業がおわってから、同じ部屋の友達と一緒に、映画を見に行くのだと、それはうれしそうに話していたのに。

右耳――信じられません。どうしてあんなことをしたのか、わかりません。いいえ、思いあたることなど何一つ。
左眼――あの娘には、不自由な思いなどさせたことはありません。
右眼――何があっても乗り越えていける娘だと思っていましたのに。でも何故？
右耳――何故？
左眼――何故？
右眼――何故？
右耳――さがせ。
左眼――組み立てろ。
右耳――あるはずだ。
左眼――この部屋の、
右眼――どこかに。
一同――机、椅子、本棚、窓ガラス、ベッド、蛍光灯、鏡、電気スタンド、コーヒー・カップ、ドライヤー、ぬいぐるみ、ブラウス、目覚まし時計、じょうさし、絵葉書、カーテン、じゅうたん……日記帳！

右眼――――中へ、
二人――――はいろう。

第二章　梅雨

クラス委員会の席。いづみが教壇に立って話している。

いづみ――――では次に体育祭の種目に関する意見を述べてください。やりたいと思う種目を何でもいいから言ってください。あれ、どうしたの。誰か何か言ってよ。みんな、一緒のクラスになってから初めての行事なんだから、もっと積極的にやろうよ。ね。どんなのでもいいんだ。じゃ、一人ずつ順番にあてていくからさ。思いついたの言ってみてよ。ねえ、言ってよ。何か言ってよ。どうしたの？　言ってよ。誰か。言ってよ！

寄宿舎の部屋。体操着姿の五人。

京子――――おい、麻里、ちょっと二百円かしてくんない。
麻里――――何につかうの。
京子――――いや、ちょっとね。何でもいいじゃない。すぐに返すからさあ！
麻里――――何につかうの。煙草、じゃないでしょうね。

京子――お、当ったりぃ！　さすが麻里はカンがいいねえ。頭のいい人はちがうね。
麻里――冗談じゃないわよ。誰が煙草買うお金なんかかすもんですか。
京子――そうかたいこと言うなよ。毎日毎日体育祭の稽古ばっかでさあ。へとへとなんだよ。たまには人間息抜きも必要よ。息を抜くにはシガレットが一番。な、頼むよ。小銭きらしちゃったんだよ。
麻里――どうしてあんな身体に悪いもん好きなの。信じられないわ。
京子――うまいぜえ。吸ってみるか。
麻里――やーよ。こっち来ないでよ。あたし、煙って大嫌いなんだから。
京子――はじめは誰でもそう言うんだよ。
麻里――やだって言ってるでしょ。
いづみがはいってくるが、いつもと違って落ち込んでいる。
京子――お前のそういうオツムのかたいとこが不愉快なんだよ。
麻里――不愉快はあんたでしょ。
京子――（麻里に向かって悪口の言い放題）グリップ、アタック、フロンティア、でる単、代ゼミ、駿台、河合塾！……おい、とめないのか、ピップ。今から麻里を四の字がためにしよ

うか、コブラツイストにしようか迷ってんだけどさ、どっちがいいと思う？

麻里――何、それ。

京子――プロレスだよ。

麻里――やだ、下品！　京子って下品よねえ、いづみ。

京子――やけに静かだな。

麻里――ねえ、いづみ、どうかしたの？

いづみ――別に。

京子――変だ。すごーく変だ。おい腹でもくだしたのか。

麻里――薬あるよ。

いづみ――ほっといてよ。

京子――わかった、怒られたんだろ。

いづみ――うるさいなあ、ちょっと静かにしてくんないかなあ。

みどりと恵子が帰ってくる。

恵子――つっかれたあ。四キロも走らせるなんてあんまりだぁ。

みどり――もう死にそう。

恵子――……あれ、どうしたの？
麻里――いづみがさぁ、おちこんでるのよ。
みどり――いづみ、何かあったの？
いづみ――何にもないってばぁ。
京子――さっきからずうっとこの調子なんだよ。
恵子――……いづみちゃん、もしかしてさっきのこと、気にしてるの。
いづみ――してないよ。
みどり――さっきのことって？
いづみ――してないってば。
恵子――……うん、昼休みに一年のクラス委員会があってね、いづみ、議長やってるでしょ、あんまし意見出なくって、いづみが一人でまとめちゃったんだよね。したら、B組の子がさぁ、いづみが全部一人で勝手にきめちゃったから、あれじゃ何にも言えなくなるって言ったんだよね。で、他の子たちも騒いでさぁ。
いづみ――もういい。あたし、クラス委員やめる。向いてないんだ、どうせ。
みどり――いづみ……

いづみ――人の意見きいてまとめるなんて、私ほんとはすごーく苦手なんだ。

麻里――そんなことないよ。いづみいつもしっかりやってるじゃない。リーダーシップとるのってやっぱりいづみが一番うまいよ。

いづみ――そう言って全部私にばっかり押しつけるんじゃない。自分たちがやりたくないからって。私一人みんなの心配して走りまわって世話やいて。一生懸命やって昼休みなんかも遊ぶ時間なんか全然なくて、それなのに、自分たちは何にもやってないくせに、私のこと、おせっかい焼きだっていうの、あんまりじゃない。もういや、私。いつだってニコニコ、ニコニコ、馬鹿みたいだよ。ほんとにもう。私だって泣きたい時だってあるよ。さぼりたい時だってあるよ。全部ほっぽって寝ていたいよ。いいねえ、あんたたち気楽でずるくって。どうして私ばっかり……

いろんな女生徒たちがいづみのそばを通りかかる。いづみ、どの人にも誠意をこめて返事をするが、答えは一つもかえってこない。

あ、おはよう。元気？　うん、あれね。大丈夫。まかしといて――わかってるって、私、やっとく。おはよう。おはようございます。はい、はい。そうですね。だと思います――うわあ、何、それ、かわいい――えっ、ちょっとまって。今行くから――あ、そのことな

ら私が――あ、サンキュ、そこおいといて――プリント？　はい、配っておきました――こんちは――どーもどーも、ごくろうさん――こんちは――さ、今日もガンバ！　ファイト！――今いくから――何、何の話？――おはようございま――こんちは――行くからってば――おはよう――おはよう――もういやだぁ――いやだぁ――いやだぁ――

京子――じゃあさ、こうすれば。「私は馬鹿です」つて紙に書いて、胸につけて歩くの。

いづみ――ふざけないで。

京子――ふざけてないよ。だってピップ、お前、馬鹿みたいなんだろ。「私は馬鹿です」って皆に言って歩けばいいじゃないか。

みどり――私、一緒に歩いてあげるよ。私、この数Ⅰのテスト26点だったもん。

京子――ま、まけた。オレ24点……

恵子――勝ったっ、35点！

みどり――でも麻里は？

京子――あいつは馬鹿みたいにできるから、やっぱり馬鹿なんだ。――おい、麻里、紙に書けよ、「私は馬鹿です」。

麻里――まかしてちょ。

五人、それぞれに紙をかかげて行列。

一同――こんちは、私は馬鹿です。あ、どーも、おそーじご苦労さんです。私は馬鹿です。バーカー、バーカー、バカをよろしくお願いいたします。よっ、オレたち馬鹿、そこんとこヨロシク！　先生！　私、馬鹿なんです。だからわかりません。

京子――えー、セントマリアの皆様、まいどおさわがせしております。馬鹿でございます。クラスでご不用になりました、馬鹿、うすのろまぬけ、ドジ、ブスのたぐい、ございましたら、一緒に馬鹿やりませんか。

いづみ、なかなか言えずにうつむいている。

みどり――ほら、いづみ、言ってごらんよ。

麻里――スカッとするよ。

いづみ――私は……私は……バ…バカ…です……バ……カ……です。私は……私はバカ……です。

恵子――その調子！　ちゃんと前向いて、大きな**声**で！

いづみ――全校生徒の皆さん。突然ですが、私は馬鹿です。司会が下手です。結論出すの下手です。だいたい話し合いなんて嫌いだし、ニコニコあいさつするのも、プリント配

るのも生徒会室行くのもほんとは大嫌いで、もう何もしたくありません。だから私はすごい馬鹿です。だけど、そのことうまく今まで皆に言えなくって、私ってすぐそういうの一人で背負っちゃっておちこむタイプだから、そういう性格自分でも嫌なんだけどしょうがなくって、でもなおします。やりたいことやります。がまんやめます。だから、私、今日から、馬鹿です。大大の大馬鹿です。そういうわけですので、今後ともよろしくおねがいします。この件に関して、何かご意見ご質問がありましたら、どうぞおっしゃってください——おっしゃってください——何か言ってください——誰か言ってください——どうしてだまってるの——ねえ、言って！　言って！——何か言ってよぉ！

と、話をきいていた全校生徒が立ち上がって、いづみにむかって歩いてくる。

京子——こいつら、口がない！

一同——えっ!!

みどり——やだ、こわい！

麻里——こっちくるよお！

いづみ——何か言って！　何か言って！　何でもいいから言って！

京子——ピップ！　気をつけろ。こいつら口がない。目も耳も鼻もない。何もない！

恵子――だめよ、近づいちゃ！

口なし群団は五人をとりかこみ、ぐるぐるまわる。こづいたりもする。

麻里――ちょっと、さわらないでよ！

みどり――こわいよお！　こわいよお！

恵子――あっちいけ！

いづみ――（自嘲気味に）そうかあ、そうだったのかあ、口なしおばけかぁ。あはははははははは

いづみ――小さな石でできた箱をみつけた。四方には鉄の枠ががっちりとついていて、まわりには言葉もないくらい昔々の古代人の黒っぽい顔が描いてある。眼ばかり大きく、ぎょろりとむいていて、まばたきもしない。右足を入れればもういっぱいの大きさだった。誰もそばにいないのを確かめて左足も入れた。それから、ひざを折って、ぎゅっとつめこんだ。腰を押しこみ、すきまから手を入れてひざをかかえこむと、もう身動きができない。だけど、首を縮めて肩をすぼめて、顔を中にうずめた。息ができなくなった。指先がぐいとゆがんで、きりきりいたむ。腕がひきつれる。心臓がどっくんどっくんする。すると、

誰かの足音がきこえた。そっと近づいて、真上からぎゅっとふたをした。重たい重たい石のふただ。それから太い鉄の鎖をつけて、地面の底の深い深い穴にそろりそろりとおろしていった。下むきにしかうごかないかたわもののエレベーター！　出して！　ここから出して！　出してよぉ！　出してよぉ！　出してよぉ！

――――――六月十五日、梅雨がはしまった日。

それから数日後の寄宿舎の部屋。雨。

恵子――体育祭、流れちゃったね。

みどり――あんなに練習したのに。

麻里――馬鹿みたい。

恵子――やだなあ、日曜日なのに雨なんて。どこにも行けないじゃない。

いづみ――海行きたい。ね、京子、海行きたい。行こう、行こう。

京子――行きたくねえよ。海なんて、あきたよ。

いづみ――行こうよぉ。一緒に行ってよぉ！

京子――やだよ。

いづみ――どっか行きたい。どっかちがうとこ行きたい。あそびたい。すっごく、めちゃくちゃあそびたい！

京子――オレはやだね。どこ行ったって同じじゃないか。つまんないよ。あーあ。

いづみ――だから何か面白いことしよう。こんなとこいたら腐っちゃうよ。

京子――面白いことなんてないよ。何やったって同じなんだよ。――あー、もう寝よう。おやすみ。

いづみ――（思いつめたように）行く。あたしどっか行く。ぜったい行く。

何もなかったかのように、次の日の朝。

恵子――はやくう、一時間目、おくれちゃうよ。

みどり――いやーん、まってぇ！　リボンがむすべないんだあ。

京子――おい、ライナス（みどりのあだ名。いつも枕を抱いているのでついた。因みにライナスとは、漫画「チャーリー・ブラウン」に出てくる、いつも毛布をひきずっている男の子のこと）、代返たのむ！　おれもうちょいねむるから。

いづみ――ねえ麻里、レッスン8、単語ひいてある？

麻里――うん、あるよ。

いづみ――わるい。次の授業、ノートかしといてくれないかな。
麻里――いいとも！
恵子――もう、おいてっちゃうよ！
みどり――まっててってばあ。

刑事たち、次の部屋へ、十三階段をのぼる。

一同――冷蔵庫
右眼――サンヨー
右耳――2ドア
左眼――三万七千六百円

冷蔵庫をあける。中に入っている品物を読みあげる。

一同――バター、ジャム、マヨネーズ、ケチャップ、トマト、レタス、セロリ、カリフラワー、コンビーフ、ロースハム、ベーコン、たまご、牛肉、豚肉、羊肉、ショートケーキ、コカコーラ、アイスクリーム、冷ご飯、ハンバーグ、フライドチキン、ケンタッキー、マクドナルド、西友ストアー、雪印、小岩井乳業、東武ストア、チョコレート、明治、

森永、セブンイレブンいい気分、ダイエー、稲毛屋、ファミリーマート、ピーコック、絹ごし豆腐、ファンタオレンジ、ファンタグレープ、ファンタアップル、いちご、いちごミルク、カルピス、ヨーグルト、クリームチーズ、フレンチドレッシング、キャベツ、マカロニサラダ、ツナサラダ、カニサラダ……

右耳――時限爆弾……

二人――まさか！

左眼――製造年月日は！

右耳――ない

右眼――合成着色料は！

右耳――ない

左眼――保存期間は！

右耳――ない

右眼――販売会社は！

右耳――ない！

右耳、冷蔵庫から爆弾を取り出してほうりなげる。炸裂！　飛行機のエンジン音がかぶさ

る。爆弾がまた、炸裂する。

右眼――もえている
右耳――まちが
左眼――もえている
右眼――家が
左眼――もえている
右眼――人が
左眼――もえている
右耳――女が　もえている
右眼――男が　もえている
左眼――子供が　もえている
右耳――父親が　もえている
右眼――母親が　もえている
左眼――電信柱が　もえている
右耳――犬が　もえている

右眼――少女が　もえている
右耳――生存者は
左眼――不明
右耳――けが人はいるか
左眼――わかりません
右眼――ここからでは
左眼――見えません
右耳――何も
左眼――見えません
右眼――もえている
左眼――もえている
右耳――まちが　もえている
右眼――その日、朝日新聞朝刊の第三面では、七つの国と十八の都市と三百六十九の村で七千七百戸の家が焼け、八万八千八百人の人類がもえつきた。
右耳――輪転機がガラリガラリとまわる。トラックが走る。駅につく。時給五百円の

学生アルバイトが肩の筋を痛める。キオスクのおばさん到着。電車がホームにはいってきた。ペル、ジリリ。微香性の化粧水を愛用する中肉中背のインテリゲンチャは小銭がない。おばさん、あわてて五百円玉の束をガチャリ。八万八千八百人の人類は、網棚の上からキャツと叫んでころがりおち、ハイヒールにひきさかれて、黙った。

左眼――朝御飯は、コーンフレークスとりんご半個。昨日と同じ。少女はその日、少したいくつだった。

右眼――岡本麻里、十五歳。一九六七年一月十日生まれ。

右耳――東京都杉並区南阿佐ケ谷十六の七メゾン阿佐ケ谷一二〇一。

左眼――将来は父の跡をついで医師をめざす。十一歳年のはなれた兄が一人、東京でデザイン関係の仕事をしている。

第三章　夏

夏休みである。麻里は自宅に帰り、机に向かって必死に勉強している。

麻里――$2x = \frac{y-6}{5} = \frac{4z-1}{7}$

$$3\chi^3 + 2\chi^2 + 17x + 4xy + 3y^2 + 3$$

$$59x + 3y + 6z = 0$$

どっかの海の近くの駅では、京子たちが遊びに来ている。

京子――ごめーん、ごめーん、オレはものすごく早く起きたのに、バスの奴が走りたくないっていうもんだからさぁ。

恵子――うそばっか。

いづみ――ねえ、早く行こう。電車きちゃうよ。

みどり――見て見て。ほら、いっぱい持ってきたんだ。ポッキーでしょ、きのこの山でしょ、エンゼルパイでしょ、みかんでしょ、ポテトチップでしょ、それからママがつくってくれたパウンドケーキ。

恵子――私、トランプ持ってきた。

京子――オレ、花札。

いづみ――よし、今晩勝負しような。

みどり――ええーっ、私、花札って知らない。

京子――教えてやるよ。

恵子――あたし、ジュース買ってくる！

みどり――わあーっ、うれしい。みどり、友達と一緒に旅行するのってはじめてなんだ。わくわくしちゃう。

京子――いいか、絶対に夜はねむっちゃいけないんだからな。これきまり。

恵子――麻里もくればよかったのにねえ。

いづみ――東京の予備校の夏期講習に通うんだって。

みどり――すっごーい。あたし、夏休みも勉強なんかしたら死んじゃう。

京子――あいつはオレたちとは人種がちがうんだよ。E・Tなんだ。

いづみ――でもうらやましいなあ。医学部めざしてるんでしょ、彼女。

恵子――めざせるだけでも大したものよ。

みどり――女医さんかぁ。かっこいい！

麻里は勉強。

麻里――

$$x^3(x-9)+y(x-9)+5z(69z-1)=0$$

$$\int_{-1}^{2}(x^2+3x+5)dx$$

$$3x+\sqrt{7}=5y+1=6z$$

海で。

みどり――やだあ、しょっぱい！

恵子――大丈夫。息をいっぱいにすって、ゆっくり水に顔つけてごらん。

みどり――うっぷ！　鼻にはいっちゃった。

恵子――平気よ、平気。もう一ぺんやってみて。

いづみ――大きな波がきたぞお！

京子――まけるもんかぁ。あ、まけちゃった。

恵子――ほら、できたじゃない。

いづみ――ジミー（京子のあだ名・不良っぽい男の子みたいだから。因みにジミーとはジェームス・ディーンのこと）、深いところまでいってみない。

京子――よおー！　恵子もこいよ。

みどり――みどり、浜で応援している。

恵子――あたし、中学の時、平泳ぎの選手だったんだ。

京子――オレだって！

いづみ――いい。あそこに旗がたってるでしょ。あそこまで、よーい、スタート！

みどり――麻里ちゃん、元気？　勉強うまくいってる？　私たち、今海に来てるの。干葉の館山ってとこ。もうすっごくいい天気で、来た日から焼けちゃって、まっくろどぇーす。お風呂にはいると痛くって、いづみが日焼けどめ忘れたのがいけないんだ。夜は、花札をやってます。恵子が以外と強いんだ。麻里は花札って知ってる？　すっごく面白いんだよ。あと三日も泊まります。楽しくってずうっとここにいたいなぁと思います。麻里もくればよかったのに。予備校はむずかしいですか。医学部ねらってるんだってね。すごい。でも麻里ならきっと大丈夫だよ。では身体に気をつけてがんばってください。お返事ちょうだいね！　ライナス・みどりより　P・S　明日は西瓜（すいか）わりをやります。麻里もくればよかったのに。

麻里は勉強。

麻里――$\frac{2}{3}x^2-75=(x^2-y^2)\div 4y^3$……

――長い沈黙。そばに兄がいる。

麻里――ねえ、お兄ちゃん、何で人間は生きてるのかなあ。

兄――いきなり、むずかしい質問だなあ。

麻里――生きてて何がうれしいんだろう。

兄――そりゃ人によっていろいろあるさ。子供がかわいくてその子のために生きている人もいるし、金もうけが楽しみの人もいるし、人それぞれだろ。

麻里――お兄ちゃんは？

兄――俺か？　俺は、そうだなあ、あんまし深く考えたことないからなあ、仕事が忙しくて。

麻里――仕事、面白い？

兄――まあ、面白いよ。そりゃ嫌なこともあるけどさ。

麻里――嫌なことあっても面白い？

兄――そりゃ、何もかもうまくはいかないよ。でもがまんしたあとで、努力が実るとうれしいもんだよ。

麻里――ふうーん。

兄――どうした麻里、急に考え込んだりして。勉強進まないのか。

麻里――そんなことないけど。でもいいなあ、お兄ちゃんは自分の好きな道にすすめて。

兄――お前だって医者になりたくてめざしてるんだろ。

麻里――まあね。それに誰も病院継がないとお父さん悲しむでしょ。
兄――嫌だったらやめてもいいんだよ。親父は別に気にしやしないさ。
麻里――でも私、別に他にやりたいことないし。
兄――俺はまた、お前が好きであんなに勉強してんのかと思ってた。
麻里――まさかあ。あんなもん面白いはずないじゃん。一番をとるのはうれしいけど、ほんとはそんなことどうでもいいんだ。ただ……
兄――ただ？
麻里――何もしていないとかえって不安でさ。――ねえ、お兄ちゃんて恋人いる？
兄――そりゃお前、俺だってなぁ、この年だもん。
麻里――その人といると楽しい？
兄――……まあな。
麻里――ふうん。でも、その人だっていつかは死んじゃうでしょ。そう思ったら虚しくならない？
兄――シビアなこと言うな。
麻里――あたしね、楽しいっていうのがどういうことなのか、よくわかんないんだ。

兄――楽しいなんてのは、わざわざ考えたりしてわかるもんじゃないさ。全部忘れてる時が以外と楽しかったりするんじゃないのか。

麻里――そうかなあ。そうだったら何か考えたりするのって不幸せみたいじゃない？楽しい……楽しい……私はいったい何が楽しいんだろ……

旅館でトランプをしている四人の姿が浮かぶ。

兄――疲れてんじゃないのか、たまにはどっか出かけてきたら。

麻里――私、人混みって苦手。何だかぞっとするの、人がたくさんいるの見てると。あの人たちみんなが家族とか恋人とかいてさ、毎日食事なんかしてるのかと思うと何か信じられなくて。爆弾かなんかおっこってきて、全部ふっとんじゃったらすかっとするんじゃないかなって思ったりしたことなーい？

兄――麻里、お前、クラいなあ。

麻里――どうしてあんなにたくさんいるんだろう。みんな、ほんとに楽しいのかなあ。ねえ、よく平和とか、いうでしょ、政治家なんか。あーいうのって、ほんとに平和になっちゃったら、以外といらいらするんじゃないかって思うんだ。第一、どういうのが幸せなのかっていったら、お兄ちゃんは、どーいうんだと思う？

兄――大丈夫さ、平和なんてそう簡単になりゃしないから。
麻里――そういったら、じゃ、何のために生きてるのかわかんないじゃない。
兄――わかんないんだけど、生きてるのさ。
麻里――明日も？　明後日（あさって）も？　ずうっと？　大人になって、結婚して、子供産んで、おばあさんになって、死んじゃうまで、ずうっと同じ？　私、旦那さんの下着とか洗って、夕御飯とかつくって、そればっかり毎日やってる入ってよく平気だなぁと思う。
兄――そりゃお前がまだ若いからさ。その時になってみればまた考え方がかわるよ。
麻里――わかってるよ、そんなこと。でも今気になるんだから仕方ないじゃない。
兄――……お前、大丈夫か？
麻里――大丈夫って、何が？
兄――いや、何でもないけどさ。ただ、あんまり思いつめるなよ。
麻里――あ、そういうことか、大丈夫よ。死んだりなんかしないから。だってそれも馬鹿らしいじゃない。
兄――そうだ、そうだ。
麻里――それに、痛いのとか苦しいのとかやっぱりやだもん。もしも全然苦しくない

んだったら死んでみてもいいけど。

兄――――おい、おい、

麻里――――大丈夫だってば。そんな顔しないでよ。こう見えてもあたしって以外としっかりしてるんだから。ちゃーんと勉強して大学にはいっていいお医者さんになって、いい人みつけて結婚してわりといいマンションにはいったりして、お兄ちゃんも時々招待してごちそうしてあげる。なーんてね、へへへへへ。

麻里――――芥川龍之介『杜子春』を読んで　一年C組　八番　岡本麻里

「杜子春」は、「おかーさーん」と叫ぶことによって、地獄からまた、以前の生活にひきもどされる。ほっとするような、拍子抜けするような結末である。肉親への情愛を失くしてはならない、という仙人のさとしは感動的だ。だがなにがしかの金を与えられて、また雑踏にとりのこされた杜子春の後ろ姿に、私はいいようのない淋しさを感じてしまった。杜子春はもう仙人にはなれない。金持ちにもならないだろう。友人たちへの深い絶望は、杜子春の残された人生を孤独なものにするだろう。両親もいつかは死んでしまう。雑踏の中でたった一人になった杜子春は、なにがしかの金で、これから何をし、何を思い、何を愛

して生きていくのだろうか。私は、その後の杜子春を読んでみたいと思った。

――八月三十一日、午後遅く激しい夕立。雷で電車がとまった。台風が近づいているらしい。明日から二学期。

海の近くの駅。

京子――おい、恵子とライナスは？

いづみ――売店でおみやげ買ってる。

京子――たくもう。今度急行のがしたら一時間も待たなきゃならないんだぜ。

恵子――ライナス、こっち、こっち！

みどり――ごめんねえ。麻里のおみやげ、なかなか決まらないんだもん。

いづみ――何にしたの？　結局。

恵子――あのねえ、鈴のついたキーホルダーでしょ。それにしおり。

いづみ――わあ、かわいい。

みどり――それとね、おまんじゅう。汽車の中で食べよう。

京子――おー、よくやった。

恵子――あ、来たよ。
京子――おーし。はやく乗って席とろうぜ。
いづみ――走るぞお！
みどり――まって、まってぇ！

激しい雨とも波音ともつかぬ音。

誰もいない寮の部屋で刑事たちは、
右耳――あら奥様どこかおでかけ。
左眼――ええ、今日はちょっと実家で、排他主義なんですの。
右眼――まあ、よろしいこと。おぼっちゃんは？
左眼――さいわい主人の母が隣人訴訟なもので。
右耳――いいわね、おたくは。うちなんか昼間っから基本的人権なんですもの。
右眼――うちもよ。近頃は都市空間が団地妻でしょ。困ってしまって。
左眼――わかるわあ。
右眼――わかるでしょう。

右耳――わかるはずないわよねえ。
右眼――でも仕方ないわよね。どうせ私たちなんかダウ式平均株価ですもの。
左眼――主人がもう少しそれをわかってくれるといいんだけど。
右耳――あら、駄目よ。男っていうのはしょせん北大西洋条約なんだから。
右眼――そうなのよ。いつもいつも先天性割引国債だから、状況分析が森羅万象っちゃうのよね。
左眼――だから私ね、時々所得税法を全自動洗濯機にしてるの。
右耳――わかるわあ。
左眼――わかるでしょう。
右眼――わかるはずないわよねえ。
右耳――でも、おたくなんかいいわよ。キャッシュカードが無人バスでしょ。モノレールだって小さじ一杯じゃないの。
左眼――まあね。
右眼――トルコ行進曲もサリドマイドの身にもなってよぉ。これじゃまるでモルモン教会みたいじゃないの。

右耳――そうはいってもねえ。組織暴力はエアロビクスでしかないし。

左眼――ほんとに日教組ときたらあいかわらず太陽にほえられろでしょ。

右眼――わかるわあ。

左眼――わかるでしょう。

右耳――わかるはずないわよねえ。

右眼――吉川京子、十六歳。一九六六年十二月五日生まれ。

右耳――本籍地、神奈川県鎌倉市北鎌倉六の四。

左眼――三歳の時に両親協議離婚、以後母親しづの手で育てられる。妹ゆかりは父のもとに。

右耳――そのことが原因だったとは思えません。あれからもう十年以上もたっているのですから。私はあの子に何もかも話しました。隠したりするとあとでよけいつらい想いをすると思いましたので。

左眼――でも、表面には見えない部分で埋めようのない欠落を残してしまったとは考えられませんか。

右耳――私は強い子に育てたかったのです。勉強のことも、友達のことも、煙草を吸

い出したことも、とやかく申しませんでした。自分で体験して学んでほしかったのです。選んでほしかったのです。世間に父親のない子はたくさんいます。体の不自由な子も、口のきけない子もいます。けれど、不幸を悲しんでばかりでは生きていけません。与えられた運命をしっかりと受け止めて自分の足で歩いてほしかったのです。

左眼――でもそれが結果的には。

右耳――私のせいだとおっしゃるのですか。あんまりです。確かに行きすぎた放任主義だったのかもしれません。けれど私は忙しかったのです。とても忙しかったのです。忙しかったのです。

右眼――母親は泣いた。

第四章　晩秋

京子が一人でぼんやりと煙草を吸っている。寄宿舎の部屋。一同、期末テストの勉強中。

麻里――だから、ここにXを代入して、3で割ると、元の数が出てくるから、それを公式にあてはめれば距離がわかるでしょう。

みどり――……うーん……

麻里――したらそれにZの二乗をかけて約分すれば、あとはかんたんでしょう。
みどり――……うーん……だけど、どうしてここにZの二乗があるの？
麻里――だから、もうさっきから何度も言ってるじゃない。やんなっちゃうなあ。ここにXを代入して、3で割るとぉ。
いづみ――ちょっと、静かにしてくんないかな。
麻里――だってライナス、全然わかってないんだもん。あと三日よ、三日、数Ⅰは二日目の一時限なのよ！　どうすんの、あんた！
恵子――大きな声出さないでよ、またわかんなくなっちゃったじゃない。
みどり――どうしよう……あたし留年しちゃうよぉ。
麻里――ほら、また泣く！　もう一度説明するから。今度一回きりよ！　ちゃんと覚えるのよ！
いづみ――あーもううるさい、うるさい、うるさい！

京子が歌を歌いだす。

京子――〜泣かしたこともある、冷たくしたことも……
みどり――あーもうわかんない！

いづみ――ちょっと京子、静かにしてよ。みんな勉強してるんだから。
京子――あ、そう。どうぞご自由に。（歌う）
いづみ――静かにしてっていってるでしょ。
恵子――京子！
京子――オレは歌いたいんだ。勉強したけりゃ勝手にすればいいだろ。
麻里――ちょっと、何よ、その態度！
恵子――ほっときなさいよ、麻里！
麻里――恵子は黙ってて。あたし京子のああいう自分勝手なところってほんと腹立つのよ。
京子――自分勝手はどっちだと思ってるんだろうね。いい子ちゃん。
麻里――この際だからはっきり言うわ。あなた一人がいるおかげで私たちがどれほど迷惑しているかわかってるの。そりゃ京子は好き勝手やってて楽しいかもしれないけど、部屋は煙草臭いし、勉強の邪魔はされるし、夜はいつまでもおきてるし、あんたが無断で外出するたびにあたしたちがどれほど言い訳に苦労してると思うの？
京子――オレがいつ言い訳してくれって頼んだよ。

麻里――じゃ、ほっとけっていうの。友達だと思うから善意でやってあげたんじゃない。

京子――オレはそんなに嫌ならやらなくていいって言ってんだよ。

麻里――あ、そう、じゃ退学になってもいいのね。わかったわ、今度からそうするわよ。

恵子――麻里も京子もやめなさいよ。

いづみ――だけど私、麻里の言うことって少しはいえてるって思うよ。だって確かに京子最近、すごい勝手だよ。こうやって五人が共同生活してるんだから少しは我慢してくれないと困るよ。

麻里――でしょ。最近、この部屋、先生にすっごく目つけられてるのよ。みんな京子のせいよ。

恵子――それはちょっと言いすぎじゃない。

麻里――でもそれが真実でしょ。

みどり――そんな言い方したら京子がかわいそう。

いづみ――でもやっぱ京子少し私たちに甘えてるよ。

京子――そうか、悪いのはオレか。オレだけか。

いづみ――そうは言ってないよ。だけどやっぱり、もう少し考えてくれなくちゃ。
京子――考えるって何を！
麻里――今だって皆が勉強してるってわかってて何で歌なんか歌うのよ。
京子――歌いたかったからさ。
麻里――そういう考え方が勝手だっていうのよ。信じられないわ。どうしてそういうことができるの？　私、京子ってわかんない。あなたみたいな性格の人って許せない。最初っから嫌だったのよ。だけど同じ部屋になっちゃったから仕方なく……
恵子――麻里！
京子――……あ、そう。そうか、皆、はじめっからそう思ってたのか、気がつかなかったよ。一緒に楽しんでるんだとばっかし思ってたよ。オレって鈍いなあ。は、なーんだそうか。嫌なのをつきあってくれてどうもありがとさん、ごめんな、ばかやろー。（一人で部屋を出ていく）

職員室で。姿は見えないが、声はどうやら麻里といづみ。

声1――ええ、私たち、とっても迷惑してるんです。吉川さんて、朝もなかなか起きなくて、授業もさぼったりするんです。

声2――時々、夜帰って来ないこともあって。いえ、どこに行くのかは知りませんけど。

声1――それに、あの、煙草とか、お酒……いえ、何でもありません、ただ、皆困ってるんです。

声2――勉強できないんです。

部屋にみどりが駆け込んでくる。

みどり――ねえ、ちょっと大変!!　大変!!

恵子――どうしたの！

みどり――京子が今、校長室に呼ばれたの！

恵子――ええっ!!

みどり――さっき、私たちの部屋に生活指導の先生たちがきて、ひっかきまわしてたんだ。お酒とか煙草とかみつかったらどうしよう!!

恵子――どうしよう!!

校長室、先生の声。

声――一年D組、四十二番、吉川京子だね。

京子――（返事をしない）
声――どうして返事をしない。
京子――だってわかってるんでしょう。だったら別にいいじゃないですか。
声――何だその言い方は。
京子――早く本題にはいってくださいよ。なんかちょっと頭痛くって。
声――寝不足だからなんじゃないのか。よく外泊するそうだねえ、どこへ行ってるんだ。
京子――どこだっていいでしょう。
声――どこだときいているんだ。
京子――あんたには関係ないだろう。どうしていちいち個人的なことまで言わなきゃいけないんだよ。
声――私は教師だ。親御さんから君たち一人一人をお預りしている以上、君たちに問題がおこらないように見守る義務がある。どこへ行っていたのか言いなさい。
京子――別に何にも問題なんかおこしていないよ。
声――女の子が一人でそんな夜遅くに出歩くこと自体ふつうじゃない。何かおこっ

たらどうするんだ。
京子――何かって何ですか。
声――いろいろあるだろう。
京子――男と寝るとか乱暴されるとかいうこと？　いやらしいね、あんたたち。
声――何という言い方をするんだ！――で、どうなんだね。
京子――ご想像におまかせしますよ。ははは。
声――君は！　第一、外泊は規則で禁止されているはずだ。
京子――誰がきめたんです、そんな規則。規則にどんな意味があるんだ。皆、同じような格好して同じことしゃべって、朝から晩までカリカリカリカリ下ばっかりむいて。
声――人間が集団で生きていくためには一人一人が我慢し、押さえていかなくてはいけないことがある。それが規則だ。君は自分がどんなに勝手なことをして人の迷惑になっているかわからないか。
京子――私は規則の方がよっぽど人の迷惑だと思うけどな。さっきからきいていると、私がよっぽど何かやってるみたいだけど、私は自分で正しいと思ったことしかしていないし、人を傷つけたこともない。いつも自分一人でやってきた。一人で生きてきた。規則、

規則っていうけど、結局、あんたたちだって、自分がかわいくって、べんじょむしみたいにまるまっちく身を守ってるだけじゃないか！

声――――そうじゃない。君は一人でなんか生きていない。君がここまで大きくなるためには、どれだけの人が力をかしてくれたことか。規則というのはね、そういうあたたかい人と人とのつながりのことなんだよ。

京子――――ちがう。私は一人で何でもやってきたんだ。

声――――そうじゃない。君はまだ若いからよくわからないんだ。人と人との結びつきがどんなに大切か。

京子――――ちがう！　何かとってもちがう！

声――――ちがわない！

京子――――ちがう！

部屋で。

麻里――――私、まさか退学になるなんて思わなかったんだもの。部屋をかえてもらおうと思っただけだったんだもの。本気であんなこと言ったんじゃないもの。私、京子のこと本当は好きで、何でも自由にできるからうらやましくって、それで、それで……（半分泣いて

いる）

恵子――……ねえ、先生のとこいこう。頼みにいこう。

みどり――そうよ。せめて停学ぐらいにしてもらおう。みんなで頼もう。

麻里――あたし、京子になんて言おう。あたし、何であんなこと言っちゃったんだろう。

いづみ――こうなったらそれしかないね。

学校の裏手の草原で京子が一人でいる。四人が走ってくる。

みどり――京子！　京子！　大丈夫だよ。二週間の停学だって！

恵子――よかったねえ、また一緒にいられる！

みどり――京子！　京子！　よかったぁ！

いづみ――ごめんね、京子、あんなこと言うつもりじゃなかったんだ。ほんとにごめん、なんていってももう許してくれないかもしれないけど、ごめん！　もう自分が嫌になっちゃったよ。許してください。お願いします。

恵子――ほら、麻里！

麻里――私、何も言えないよ。京子、私、何言われても仕方ないよ。だけど、だけど、ごめん、ほんとにごめん。

みどり――麻里たち、すっごく泣いてたんだ。すっごく反省してるんだ。許してっては言えないかもしれないけど、もしかしたら、これからも友達でいてくれるかな。

恵子――私たちみんな、京子のこと好きなんだ。そのことがとってもよくわかったんだ。

みどり――また部屋にもどってきて、待ってるから。

京子が黙っているので、四人帰りかける。すると、

京子――もういいよ。別に気にしてないよ。また仲良くやろうじゃないの。おい、麻里、泣くなよ。さわごうぜ、また。

みどり――あれ、雪だ！　雪が降ってきた！

恵子――雪だ！　雪だ！

五人はしゃぐが、京子一人ふっとさめて、

京子――ものはみなひとりだ。

石はひとりだ。木もひとりだ。

えんぴつもひとりだ。腕時計もひとりだ。

湘南電車もひとりだ。缶ビールもひとりだ。

夏もひとりだ。冬もひとりだ。
カスタネットもひとりだ。少年マガジンもひとりだ。
空もひとりだ。チ・ヨ・コ・レ・イ・トもひとりだ。
さざんかもひとりだ。海はひとりだ。
――――十二月四日。午後から雪。つもらない雪。何の味もしない雪。そっと海に溶けて、もうどこかへいってしまった。

左耳――――こちら神奈川県警、鎌倉海岸女子高生心中事件、捜査本部。現場の状況を報告してください。
右眼――――こちら現場、こちら現場、遺体の捜索が続いています。
右耳――――依然として、遺体は上がっていません。
左眼――――雨が、雨が降っています。
左耳――――遺留品は？
右眼――――五足の靴と一冊のアルバム、
右耳――――砂浜に残されていました。

左眼――潮が満ちています。まもなくすべての足跡が消されます。
左耳――入水の推定時刻は？
右眼――明け方、四時から五時の間、
右耳――一そうのボートをこぎ出して、波にのり、潮にのり、流された模様です。
左耳――その時刻に江の島は見えたか。
左眼――見えません。
左耳――東京タワーは見えたか。
右眼――見えません。
左耳――核弾頭は見えたか。
右耳――見えません。
左耳――志賀高原は見えたか。
右眼――見えません。
左耳――快適なシティー・ライフは、
右耳――見えません。
左耳――松田聖子は、

右眼――見えません。

左耳――カレーライスは、

右眼――見えません。何も、見えません。

三人――何も、見えません。

右耳――星野恵子、十六歳。一九六六年五月二十日生まれ。

左耳――本籍地、東京都杉並区荻窪十六の八サンコーポ七〇一号。星野一彦、夏恵の一人娘。父親の両親と同居。小さい頃から祖父、祖母にかわいがられて育った。黙って人の話をきいている子だった。好き嫌いなし。母親をよく手伝い、祖父に連れられて散歩に出た。編物が得意。長い長いマフラーはしかし編みかけのまま完成を待たずして――。得意な課目は国語。好きな食べ物はりんごとアイスクリーム。お気に入りのワンピースは薄いピンク。十五歳の誕生日に父親から買ってもらった。愛読書はLaLa。「綿の国星」のファン。そして好きな色はブルー。一人でいる時にはいつも絵を描いていた。

右眼――あの前日、三時間目は美術の授業だった。

左耳――課題は？

三人――海！

右耳――クラス全員が海に出てスケッチ。
左眼――星野恵子は何を描いたか。
右眼――絵があるはずだ。
左耳――さがせ！　その絵をさがせ！
四人――さがせ！

第五章　早春

寄宿舎で五人が手紙を読んでいる。

五人――はじめてお手紙します。僕は、隣の男子校の一生徒です。突然こんな手紙を書いた僕の失礼をお許しください。この間の日曜、市内のハンバーガーショップで友達と一緒にソフトクリームを食べていた君の姿を見てから、どうしても君のことが忘れられなくて、思わずペンをとってしまいました。あれから毎日、下校時刻には、校門のところに立って君を探しています。よく笑う君が好きです。そんな君をもっとそばで見ていたいと思います。寒い日が続いていますが、風邪なぞひかぬように気をつけてください。じゃあお元気で。P・S　名前を書けない弱虫のボクをお許しください。またお手紙書いてもい

いのでしょうか。……僕の星野恵子様へ

赤くなって照れる恵子のまわりではやしたてる四人。

二通目の手紙が来る。

五人――はいけい、お元気ですか。また書いてしまいました。おこってはいませんか。実はどうしても一度、君に会いたくて、恵子――さんて呼んでもいいかな。ごめん、急になれなれしくなっちゃって。今度の日曜、空いていますか。できれば空けて欲しいな。君の寄宿舎の裏に公園があるでしょう。あの大きな銀杏（いちょう）の木の下で待っています。来てくれるかな。来てください。お願いします。星野恵子様　　君の上村孝行　　荔

そしてデートの朝。

みどり――恵子、恵子。このブラウス貸してあげるよ。

麻里――だめ、だめ、可愛すぎるよ。

いづみ――でも、あいつ、意外と少女趣味のところあるから、いいんじゃないの。

京子――おい、ピップ、お前知ってるのかよ。

いづみ――え？　ちょっとね。あいつ、生徒会でね。
みどり――生徒会って、あの、もしかして、あの上村さん。
いづみ――……う、うん……
麻里――あの、あの上村さん？　生徒会長やってる上村さん？
いづみ――そう。
みどり――すっごーい!!　あの人？　えー？　あのかっこいい人？　どうしよう！　ねえ、どうしよう、京子。
京子――バカ、ライナスがデートするんじゃないんだぞ。
いづみ――でも、あいつがねえ。すごい真面目な奴なんだよね。ラブレター書くような奴じゃないんだよね。でもよっぽど思いつめたんだろうなあ。
恵子――ねえ、私どうしよう！
麻里――どうしようじゃないよ。可愛くして行くのよ。ほら、もう時間だよ。

銀杏の木の下で上村が待っている。

上村――恵子さん！
恵子――……上村さん……ですか。

上村――よかった！　来てくれないかと思った。あんな手紙なんか書いて、かえって押しつけがましい男だって思われるんじゃないかと心配だったんだ。
恵子――そんなあ。
上村――でも、信じてもらえないかもしれないけど、初めてだったんですよ、女の子に手紙なんか書いたの。いやぁー、てれるなあ。
恵子――上村さんて、人気あるんですよ、うちの学校で。
上村――いや、まいったなあ！
恵子――生徒会長なさっているんでしょ。
上村――ええ、なんとなく選ばれちゃって。座りましょうか。
恵子――はい。

間。

上村――僕、あがっちゃって、うまくしゃべれないや。何か、話してよ。何でもいいんだ、君のこと。
恵子――ええー、何言えばいいのかなあ。
上村――いっつも一緒にいる女の子たち、あれ、同じクラスの子？

恵子――寄宿舎で同じ部屋の子たちなんです。みんなとってもおもしろいんですよ。
上村――いいなあ、楽しそうで。女の子っていつもどんな話するの。
恵子――えーと、勉強のこととか、家族のことか、マンガのこととか、いろいろです。
上村――ボーイフレンドのことは？――もし答えたくなかったらいいんだ。だけど聞いてもいいかな。――君、つきあってる人いる？
恵子――えっ？　……あの……いません、けど。
上村――あ、そう。そうかあ。いやあ、あの、僕、立候補してもいいかなあ。――友達としてでいいんだ。時々手紙書いたり、会ったり、電話かけたりしてもいいかな。
恵子――……はい。
上村――よかった。うれしいよ、とっても。――ああ、今日は何かあったかいなあ。……そろそろ行こうか。遅くなると学校うるさいだろ。
恵子――ええ。
上村――また、会ってくれるかい。
恵子――……はい。
上村――じゃ、また、電話するよ。

部屋に戻ってきた恵子を囲んではしゃいでいる五人。

恵子――でもさあ、何となく……。

麻里――どうしたの？

恵子――ううん、何でもない。

みどり――いいなあ、恵子、いいなあ、素適な人……恋人……恋人かあ――どんな感じだろう。

いづみ――（一人ぽっんと他の人に聞こえない**声**で）上村孝行――上村孝行――上村孝行――そうかあ……仕方ないや。――恵子かあ……仕方ないや。

それからしばらくたったバレンタインデーの日、みぞれから雪へ……。何となく元気のない恵子。

みどり――ねえ、ねえ、恵子、あの、これ、上村さんに渡してくれないかなあ。

恵子――何？　これ。

みどり――チ・ヨ。コ・レ・イ・ト。だって今日、バレンタインデーでしょ。

京子――あれ、ライナスそんなことしていいのかよ。恵子の彼だぜ。

みどり――いいの、片想いでも。あたし一度誰かにあげてみたかったんだ。それに、上

村さんて、皆のアイドルみたいな人じゃない。どうせたくさんもらうんだしさあ。いいでしょ、恵子、あげても。

恵子――別にいいわよ。だけど自分で持ってったら。

みどり――ええっ！　はずかしい！　それにどうせ恵子も渡すでしょ。そのついでに、おねがい。

恵子――私は別に……

いづみ――照れちゃってかわいい。ほら、もうそろそろ約束の時間じゃないの。

みどり――これ、おねがい、恵子。

恵子――……ごめん、みどり、私、今日、頭痛いのよ。自分で渡して。

京子――頭痛なんか、彼氏に会えばふっとんじゃうよ。ほら立って！

恵子――痛いのよ！　とっても痛いのよ！

みどり――恵子……

麻里――行けないんだったら、ちゃんとそう言ってきた方がいいよ。

みどり――じゃあ、呼んできてあげようか。

恵子――いいわよ。

いづみ――ああ、あそこ傘もささないで。みぞれだよ、外。早くいってやんないと風邪ひくよ、あいつ。

みどり――呼んできてあげるよ。

恵子――いいってば。

京子――どうしたんだよ、変だぜ。

麻里――最近ずっとおかしいよ、恵子。もしかして喧嘩でもしたの？

恵子――してないわよ。だけど会いたくないのよ。

その夜、電話がかかってくる。

上村――もしもし。

恵子――はい。

上村――あ、恵子さん、元気だったのか、よかった、よかった、来ないから心配したよ。

恵子――ごめんなさい。

上村――何かあったの？

恵子――いえ、ちょっと……

上村――……元気ないなあ、具合悪い？
恵子――そんなことないです。
上村――……そう。もし何か心配事があるんだったら僕に話してくれないかな。できることは何でもするよ。
恵子――大丈夫です。
上村――話して欲しいんだけどな。――まあいいや、じゃあ、明日は会えるかな。
恵子――明日はちょっと都合が悪くて……
上村――じゃあ、あさっては？
恵子――あさっても。
上村――その次は？
恵子――その次も。
上村――じゃあ、君の都合のいい日に合わせるよ。いつなら空いてる？
恵子――空かないんです。ずうっと……。もう会いたくないんです。
上村――……そう、そうかあ、……会いたくないのかあ。――僕が嫌い？
恵子――いいえ、そういうんじゃないんです。だけど――。

上村――はっきり言ってくれよ。その方がいい。

恵子――……一緒にいると何だかくたびれちゃって……。

上村――……そう。

恵子――何だかちがうなって気がして。

上村――そう。そんなふうに思ってたの、知らなかったよ。全然気がつかなかったよ。だけど、それ、もっとはやく言って欲しかったな。――辛いよ。

恵子――ごめんなさい。

上村――いや、謝るのはきっと、僕なんだろうな。君をそんなに疲れさせることしかできなくて、すまなかった。――わかったよ。もう何も言わないよ。電話もかけない。手紙も出さない。君の前には現われないよ。――元気でね、じゃ、さようなら。

恵子――上村さん！　上村……

次の日の寄宿舎、相変わらずみぞれが降っている。恵子が部屋の隅でぼんやりしている。

麻里――ちょっと、ちょっと、大変！　上村さん、自殺はかったんだって！

一同――ええっ!!

振り向く恵子。

その夜、部屋で。

みどり――恵子のせいじゃないよ。

麻里――そんなことわかってるよ。だけど無関係じゃないでしょ。ねえ、恵子、あの電話の時、何か言ったの？

恵子――別に、何も。――だけど――一緒にいると疲れるって――。

いづみ――そんな！　ひどい！　恵子、ひどいよ、そういう言い方って！　あいつがどんなに恵子に気をつかってたか知ってるくせに。傷ついちゃうよ。わかってるの？　あんたあいつにとって一番きついこと言ったんだよ。

恵子――だったら他にどう言えばいいっていうのよ。だってほんとに疲れちゃったんだもん。

いづみ――じゃあどうしてもっとはやくに言ってやらなかったのよ。あいつ本気だったんだよ。

恵子――わからなかったのよ、自分でも、どう思ってるのか。

いづみ――わからないから、そのままにしてたっていうの。それあんまりずるいんじゃないの。かわいそうだよ。かわいそうすぎるよ。

恵子――そんなこと言ったってほんとに言えなかったんだもの。こんなことになるなんて思わなかったんだもの。

京子――恵子ばかり責めたって仕方ないよ。あいつが弱すぎたんだよ。

いづみ――でも！

みどり――恵子だってかわいそうだ。

いづみ――あいつがどんな気持だったかって思うと……。なのに恵子、よくあんた平気な顔してられるね。

恵子――平気な顔なんかしてないわよ。

いづみ――してるよ!!

恵子――あんたに私の気持なんか見えっこない。

いづみ――あんたっていっつもそうなんだよね。ほんとの気持はかくしておいて、人の前ではニコニコ、ニコニコして！　見えないわよ！　だってあんた人のことほんとに信じてないもの。いっつも同じぐらいの距離おいて適当につきあってるだけじゃない。そういうの一番冷たいよ。一番ひどいよ。

麻里――そんなこと言ったらおしまいじゃない！

いづみ――おしまいだよ、もう。だって、上村さん、死んじゃった……

京子――いづみ、お前、あいつのこと……もしかして

いづみ――そうよ、好きだったわよ、もうずっと前から。春に初めて生徒会の仕事手伝った時から――だけどしょうがないじゃない。あいつ、恵子が好きだって言うんだもの。しょうがないじゃない。

恵子――だったらどうすればよかったっていうの！　うそついてニコニコしてればよかったっていうの。あたしそういうことできない。

京子――最初っからそう言ってやればよかったんだよ。

恵子――だから言えなかったのよ。

京子――どうして言えないんだよ、嫌われるのこわくって、ちやほやされるのうれしくって、それで黙ってるのって、あんたずるいよ。わからない、できない、言えないって言って壁つくって、自分は傷つかないでじっとして、何が起きても自分の責任じゃないって顔して、残酷なんだよ。

みどり――ちがうよ。恵子、ほんとに言えなかったんだよ、ね、恵子。

麻里――でも昔から恵子ってそういうとこあったよ。いつも一緒にいるんだけど、普

通のことしか話せなくて、恵子って悩みなんか何もないって感じだから、結局、あ、ちがうって思っちゃうんだよね。

みどり――恵子はやさしいんだよ。平気な顔してるわけじゃないんだよ。喧嘩とかするの嫌なんだよ。

京子――だけど、そういうのってきれいごとなんじゃないの。避けて通ってるだけなんじゃないの。

麻里――でも、恵子をそういうふうにしたっていうのは、私たちも悪いんじゃないの。

みどり――じゃあ、どうすればよかったんだろう。

いづみ――どうしようもないよ。もう、どうしようもないよ。

恵子――いいよ、もう。みんなあっちへいってよ。みんな何よ、私にばっかり言って、私には、どうせ何もできないわよ、わからないわよ、人のことなんか信じてなんかいないわよ。こわかったのよ、あの人私にそっくりで、見てると苦しくって、だけどやさしくって、私、何もしてあげられなくって。死んじゃうなんてひどい、あんまりひどい。あたしまだ何もしてない。何も言ってない。話そうと思ったのに。いっぱい話すことあったのに。一人にしてよ、こっち来ないで。みんなになんかわからない。私のことなんかわからない。

みんなひどい！　みんなきらい！　あっちにいってよ！　いってってばあ！

四人、黙ってしまう。一人、二人、去る。

みどり――……恵子……ねぇ、恵子……

四人、寝てしまう。――長い間。

恵子――私には何もしてあげられない。何もできない。何もしてあげられない。何もできない、何もしてあげられない。何もできない――――――そばにいて。おねがい、そばにいて……

四人、起きてくる。恵子、泣いている。

四人――恵子……

恵子――私、だめ、もうだめ……

麻里――そんなことないよ、そんなことないよ。

恵子――だめ……だめ……

京子――しっかりしろよ！

恵子――だめよ……ごめんね、みんな、ごめんね……

いづみ――ごめん……恵子、ごめん……

恵子――ごめんね……いづみ……ごめんね……

五人、誰ともなしに立ち上がって歩き出す

麻里――一時間目は英語か。

みどり――宿題出てたよね。

京子――レッスン26。練習問題一番から七番まで。

いづみ――私たちは現国、説明文のところの漢字テスト。

京子――もうすぐ朝だ――

恵子――あ、海が白くなってきた。

いづみ――ほんとだ。

恵子――海って広いんだねぇ。

麻里――うん。

京子――すごいや。

みどり――……ねえ、死んじゃおうか……

三人の刑事が証拠をさがしている。

左耳――こちら神奈川県警。こちら神奈川県警。遺体の捜索は進んでいるか。こちら神奈川県警。こちら神奈川県警！
右眼――ヘアブラシ、ちがう！
右耳――テレビ、ちがう！
左眼――公園通り、ちがう！
右眼――ヨーロッパ、ちがう！
右耳――江の島、ちがう！
左眼――キース・ジャレット、ちがう！
右眼――ソクラテス、ちがう！
右耳――代官山、ちがう！
左眼――年賀はがき、ちがう
右眼――七里ヶ浜、ちがう！
左耳――応答せよ！　応答せよ！　応答せよ！
右耳――ミルクキャラメル、ちがう！
左眼――カップヌードル、ちがう！

右眼――ウェディングドレス、ちがう！
右耳――国会議事堂、ちがう！
左眼――灯台、ちがう！
右眼――東京オリンピック、ちがう！
右耳――エノラ・ゲイ、ちがう！
左眼――ノストラダムス、ちがう！
右眼――気象庁、ちがう！
右耳――ボート、ちがう！
左耳――応答せよ！　応答せよ！　応答せよ！
左眼――未来、ちがう！
右眼――メランコリー、ちがう！
右耳――一九八三年、ちがう！
左眼――からっぽ、ちがう！
右眼――少女！
右耳――海だ！

左眼――海をさがせ！
右眼――海の色をさがせ！
右耳――海？　ちがう！
左眼――海？　ちがう！
右眼――海？　ちがう！
三人――ちがう！

第六章　海へ

海の真白い波打ち際に向かって、五人を先頭にした少女たちが進んでゆく。少女たちの数は増えつづけているようだ。彼女たちの表情はなぜか明るい。

恵子――進め！　進め！　進め！

泣き寝入りの少女たちよ
今こそ我は汝らに告ぐ
時来たれり
ただちに哀しみの冷たい壁を打ち破り　我らと共に進軍せよ

ありとあらゆる艱難辛苦をのりこえて　何があろうと生きようとはせず
決して生きようとはせず
我らと共に進め！　進め！　進め！
麻里――――荷物はいらない　言葉もいらない！
何にもいらない　我々はただ君たちの熱き心の心からの賛同を求む
時は今　一九八三年三月二十六日　午前四時
鎌倉の我らが海辺に結集せよ
いづみ――――右前方注意　世界の大いなる歎きあり
無視せよ
左前方注意　地上の大いなる病あり
無視せよ
後方はるかに注意　下界の大いなる嘘あり
無視せよ
我らは今　今　今こそここにあり
京子――――見よ　我らが波の国　もはや分かたれることなき我らの国がかすんでみえる

悔い改めよ　悔い改めよ　泣き寝入りの少女たち
でたらめの衣を脱ぎ捨てて
道をつくれ　翼をもて走れ！
まっすぐに　まっすぐに　ただまっすぐに　進軍せよ
みどり――その国は静か　その国はやさしい
その国はやわらか　その国は白い
白い白い白い　光の国
むつみあい　寄りそって　一つに溶ける我らの国
恵子――おとうさん　おかあさん
麻里――おにいさん　おねえさん
いづみ――先生　駅員さん　八百屋のおじさん
みどり――会社員　主婦のみなさん
京子――知らない国の知らない人たち
一同――さようなら　そしてごめんなさい
恵子――こわい？

四人――こわくない！
恵子――こわくない？
四人――こわい！
恵子――こわい？
四人――こわくない！
恵子――だけど行かなくちゃ
麻里――方南町の早苗ちゃん　出発の準備は整いましたか　私たちはあなたが来るのを待っています
いづみ――緑ヶ丘の直子さん　連絡場所は江の電藤沢駅改札です
京子――国分寺のかおるさん　誰にも気づかれてはなりません　息を殺し　虫は殺さず　すぐ来てください　時間がないのです
みどり――高田馬場の陽子ちゃん　きこえますか　ここです　私たちはここでーす
恵子――まもなく陽がのぼります　無数の嘘にわかたれてしまう前に　こぎ出さなくてはなりません
京子――迷うな！　進め！　何もするな！　走れ！

心を白く入れ替えて　愛しなさい　少女たち！
身体中で愛しなさい　私たちはここにいる！
少女たち――――みなさん　本当にありがとう　ずいぶんいろいろいただきものもしましたけれど何もおかえしができなくて　本当にごめんなさい
やさしくなくてごめんなさい
私の心は小さくて　ちっとも役に立たなくて　いじわるばかりで　ごめんなさい
だけど　みなさんは　しあわせに
心の底から　しあわせに
ごきげんよう　そして　さようなら
さようなら
三月二十六日未明
明日は晴れかもしれないけれど
今はまだ暗い

天国からの少女たちの笑い声。

いづみ――あーあ、結局何てことなかったね。
恵子――うん、もうちょっと苦しいかなって思ったけど。
麻里――いい感じ。
京子――やったね。
みどり――ねえねえ、見て！
四人――あ～！
京子――ライナス、お前、アルバムなんか持ってきたのかよ。
みどり――うん、だって宝物なんだもん。
いづみ――わあー、入学式！
麻里――ずいぶん走ったね、あの時。
恵子――結局、五人とも遅刻しちゃってさ。
京子――ライナスび～び～泣いてさあ。
みどり――だってえ。
恵子――あ、これ体育祭！
麻里――すっごく練習したのに当日雨でさ。

いづみ――うん、めげたあ！
みどり――夏休み、海行った時の写真。
京子――あっこれ、オレ見てないぞ。
恵子――京子、まっくろ！　ブッシュマン。
四人――オー、イェース！
みどり――麻里も来ればよかったのに!!
麻里――ほんとは行きたかったんだよね。
恵子――そう言えばよかったのに!!
いづみ――それから十二月、わりと雪多かったよね。
恵子――うん、試験前に寒くってさあ。
麻里――ライナス、いっくら教えても、わかんないんだもん。
いづみ――留年したのかなあ。
みどり――もういいもーん。そんなこと。
麻里――二月、上村さん。
京子――あいつ、かっこよかったなあ、何かオレに似ててさあ。

いづみ――上村さんかあ。
麻里――まだ未練ある？
いづみ――ないよお！
みどり――ほんとかなあ。
恵子――もしかしたら、その辺にいるかもね、一足お先にって。
京子――あ、どーも、上村です。恵子さん、来てくれたんですね――なーんちゃって。
みどり――三月、終業式。それから四月、まっしろだあ。五月、
四人――まっしろ。
みどり――六月、
四人――まっしろ。
みどり――七月、八月、九月、十月、ずうーっと、白。
四人――まっしろ、わーい！
右耳――ねえ、ちょっと訊いていいかな。
五人――うん、いいよ。
恵子――何でも訊いちゃって。

右耳――君たち何で死んだのかな。
恵子――何でって、ねえ。
いづみ――別に。
麻里――あんまし考えなかったんだ、そういうこと。
右眼――じゃあ、誰が最初に死のうって言ったの？
みどり――誰だっけ？
恵子――何となくみんな。別に誰がっていうのはなかったよね。
四人――うん。
右耳――どうして海を選んだんだろう。
いづみ――それも何となく。
麻里――海は心の母だから、なーんてね。
みどり――グリップ（麻里のあだ名・ガリ勉なので参考書の名前をとった）、きざあ～！
京子――海の方で呼ぶんだよ。
恵子――見てるとほっとして動きたくなくなっちゃうんだよねぇ。
いづみ――でも、別に死ぬのは、どこでもよかったんだよね、ほんとのこと言えば。

四人――うん。
左眼――海は好き？
五人――大好き！
みどり――でも、ポテトチップも好き！（笑い）
右耳――今、何か欲しいものある!?
いづみ――うーんとねえ。
みどり――まくら！
恵子――私、電気毛布！
京子――ふとんだな、やっぱー。
麻里――あたし真っ白いシーツじゃなきゃやなの。
いづみ――あとは何もいらない。
みどり――おじさん、何でも欲しいものあったらあげるよ。
京子――うん、部屋にあったもの、全部もってっていいよ。
恵子――お子さんにあげて！
麻里――ねむい！　あたし睡眠は充分にとらなきゃ駄目な方なの。

京子――食事もたっぷりだろ。
麻里――そうそう。
恵子――健康優良児！
いづみ――おなかもいっぱいだし、気持いいし。
みどり――なんだかねむくなっちゃったあ。
恵子――あたしも。
京子――ねようぜ。
いづみ――うん、じゃ、おじさん、悪いけどあたしたちねむるから。
恵子――じゃ、おやすみなさーい。
一同――おやすみなさーい。

右耳――よく笑う、明るく、無邪気で、家庭にもこれといった問題もなく、成績も普通、何もない、と言ってしまえばそれまでの、
三人――何もない、と言ってしまえばそれまでの、
右耳――少女がいた、いたかもしれない、と言ってしまえばそれまでの、

右眼――言ってしまえばそれまでの、日々があった、あったかもしれない、
左眼――何も、何も起こらなかった、起こらなかったかもしれない、明るい晴れ間、樹々は芽ぐみ、葉おいしげり、枯れ落ち、幹、天を射ぬき、そうして季節移ろう日々、それだけの時代、だったかもしれない、
右眼――かもしれない、としても、いつしか雨、
右耳――雨からみぞれ、
左眼――みぞれから雪、
右眼――雪から再び雨の海岸沿いの道を長い長い長い葬列が海に向かって歩いてゆくのが見えています。遺体はまだ見つかっておりません。捜索は続いております。が、しかし波は寄せ、波は寄せ、波は寄せ、足跡を消してゆきます。早や今日の日も時刻は夕暮れとなり、ゆっくりと、ゆっくりと、江の島がかすみはじめています。
右耳――こちら現場、こちら現場、
左眼――だが、未だ、行きつきはしない葬列と、
右眼――みつかることのない遺体、
右耳――ゆっくりと、

左眼――ゆっくりと、
右眼――ゆっくりと、
右耳――とどめようのない波に洗われて、何かが終わるのかもしれない。
右眼――かもしれない、と言ってしまえばそれまでの、それまでの私の上に、雨が降っております。もう肩がぬれました。足がぬれました。瞳がぬれました。何もみえません。動くこともできません。
左眼――だがしかし、もうしばらく、もうしばらく捜索を続けたいと思います。何故、
右耳――何故、
右眼――何故、
左眼――少女たちは水になったのか。
右耳――こちら現場、こちら現場、現場には雨が降っています。世界中、本日、雨の模様です。
三人――雨の模様です。

上演記録

DOLL　NOISE公演　於池袋西武スタジオ200 一九八三年三月二十六日〜四月三日　トロイメライ　NOISE公演　於丸井新宿店インテリア館マルチパーパス　一九八四年六月九日〜十七日

LIFE　NHK・FMにて放送一九八四年十二月二十二日

著者について

如月小春（きさらぎ・こはる）。一九五六年東京に生まれる。一九七六年より劇団「綺畸」で作・演出をはじめる。一九八二年「綺畸」を退団。一九八三年集団NOISE結成、主宰。〈DOLL〉で旗揚げ。一九八四年〈トロイメライ〉（MORAL）を上演。

〈ART　COLLECTION等のパフォーマンスも手がける。著書に『如月小春戯曲集』『工場物語』（新宿書房）『如月小春のしばい』『如月小春のフィールドーノート』（而立書房）『はな子さん、いってらっしゃい』（晶文社）がある